

《書評》

趙寛子『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環  
—— ナショナリズムと反復する植民地主義 ——』  
(有志舎, 2007年)\*

洪 宗 郁

はじめに —— ナショナリズム批判の射程 ——

近年、植民地朝鮮の政治・思想に関する研究は、戦前日本の歴史を植民地帝国の次元で再検討する一連の研究成果と絡み合いつつ、大きな進展を示している。日本帝国主義の収奪とそれに対する民族の抵抗という二項対立的な図式をのり越えて、多様な領域へ問題関心を拡大している新しい研究傾向の根底には、何よりもナショナリズム批判という問題意識が据えているといえる。

ナショナリズムに基づいた朝鮮史の把握は、戦後歴史学の中では、社会経済史における内在的發展論と政治思想史における民族解放運動史の研究を両軸としながら、1960年代に北朝鮮の研究者によって先駆的に提起されて以来、ほぼ同時代的に韓国と日本に拡大し、とくに韓国社会では、1970～80年代における産業化／民主化の過程を経つつ当為と事実が絡み合う形で確実に根をおろして、今日に至っている。ナショナリズムは、朝鮮半島の人々の脱植民地化に向けた熱望を反映したものであり、また日本では戦争責任／植民地支配責任の問題と連動しつつ、アジア社会のダイナミズムを理解する回路として機能してきた。

このようにナショナリズムは東アジア地域の脱植民地化／民主化に寄与してきたが、一方で国民国家の境界に人々の想像力を制限することによって、民族や国家を横断しながら行われてきたさまざまな営みを隠蔽し、さらにジェンダー、社会階層、地域など民族に回収しきれない主体たちに沈黙を強要してきたことも事実である。最近のナショナリズム批判はまさにその地点を問うており、順機能と逆機能との間の綱渡りをのり越えて、ナショナリズムという戦後の東アジアを支配してきた巨大な歴史認識それ自体の脱構築を要求しているのである。

ここで取り上げる『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環 —— ナショナリズムと反復す

る植民地主義——』の著者の趙寛子氏は、まさにナショナリズム批判という話頭を常に意識しつつ、既存研究の枠組みをのり越える大胆な問題提起を通して、近年の植民地朝鮮研究をリードしている研究者である。趙寛子氏にとってナショナリズムは暴力の頂点にほかならない。国家や民族を頂点とするさまざまな暴力に対して趙寛子氏が示す無限に近い敏感さは、とくにナショナリズムにシンパシーを持つ知識人にとって、自分の日常と実践を顧みさせる圧力として働く。さらに趙寛子氏のナショナリズム批判には、朝鮮半島の垣根を越えて、戦前の植民地帝国そして戦後の東アジア社会から植民地主義とナショナリズムとの「敵対的共犯関係」を読み取っている点で、独特の意義を認めることができる。

戦後日本でも朝鮮半島で行われていた主体形成に向けた努力への関心が粘り強く存在したことは事実であるが、学界の主流が朝鮮半島を始めとするアジアの存在を強く意識し、またそれを思想の条件として受け止めてきたとはいえない。こうした過去に対する反省からか、近年アジアとの実際的な交流の拡大と連動しつつ、東アジアの次元の歴史変動を視野に入れた研究が続々と発表されている。しかし、韓国社会のナショナリズムに対する批判が肯定的に評価される一方で、他方では閉塞した日本社会に刺激を与える外因として韓国・朝鮮のナショナリズムが動員される傾向が依然として存在するなど、交流の拡大にもかかわらず——あるいは、その過程で増幅されている——日韓間のナショナリズムの共謀関係に対する穿鑿が十分とはいえない現状である。趙寛子氏の研究は、植民地帝国はもちろん今日まで反復している、こうした知識権力の存在に対する告発までを射程に入れているのである。

本書は、著者が2003年に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文をもとにしており、近年の著者の研究をまとめたものでもある。新しく追加された部分である終章は、現在の韓国・朝鮮の現実に対する痛烈な批判を通して、著者の研究に通底しているナショナリズム批判の矛先を明確にすると同時に、戦前はもちろん今日に至るまでを対象としている点で、研究の幅の広がりを示している。以下では著者の研究に対する体系的な紹介よりは、いくつかの論点を中心に筆者の意見や感想を述べることで書評に代えたいと思う。また、近年の著者の研究がすでに多くの研究者から理解と共感を得ているという判断の上に、ここでは、以上で述べたように著者の問題意識に対する共感を前提にしながらも、あえて批判的な読解を試みることを断わっておく。

## 1. 「主体化＝臣民化」批判について

本書の切り口にあたる第1部の第1章と第2章は、それぞれ申采浩論と李光洙論である。強烈な個性の持ち主である申采浩と李光洙、おそらく今までの朝鮮近代史研究でもっとも盛んに取り上げられてきた二人を研究の対象にしたこと自体が、既存研究の批判的克服という著者の問題意識を強く示唆している。著者は「主体化＝臣民化」を拒否した申采浩と、「主体化＝臣民化」を受け入れた李光洙を鮮明に対比させながら、「主体化＝臣民化」の過程を批判している。ここで「主体化＝臣民化」批判は、近代の企図それ自体に対する批判であり、民族主義者としての申采浩および民族反逆者としての李光洙といったこれまでの一般的な解釈とは次元を異にする。

著者は申采浩を“「民族史」からずらして、暴力批判の観点から読み直す”（17頁）という意図の下で、彼の思想に見える「暴力の〈滅罪的〉力」などに注目することで、申采浩の思想を、民族を通した「主体化＝臣民化」までも拒否したものと分析した。こうした解釈は、申采浩の思想を民族主義の真髄を示したものとして評価してきた既存の研究とは明らかに違っている。梶村秀樹氏は、申采浩の無政府主義について、“権力悪を否定したのであって、民族を否定したのではなかった”と分析し、むしろ“抽象的な国家主義をのりこえた民衆の民族主義に到達した<sup>1)</sup>”と評価した。趙景達氏も1920年代の申采浩について、“民族の元素ともいふべき抵抗主体・変革主体としての民衆に目が向けられていく<sup>2)</sup>”と評価したことがある。こうしたズレは、民族をいかに捉えるか、つまり民族を近代の企図すなわち「主体化＝臣民化」に他ならないものと見るべきか、それとも民族あるいは民族主義にある意味近代批判の可能性を見るべきか、という歴史認識の相違に起因する。

一方、著者は、李光洙の思想の軌跡については、「主体化＝臣民化」という民族主義の企図に忠実なものとして描いている。“李光洙にとって服従すべき原理は、朝鮮ナショナリズムの完成”（78頁）であって、それが結局“朝鮮人が帝国日本の「主体＝臣民」になるナショナリズムの一形態を定位”（72頁）するに至ったという分析である。とくに李光洙の歪められた主体形成の企てを捉えるために著者が用いた「親日ナショナリズム」という概念は、抵抗と協力が共存するきわどい状況を含蓄的に表すキータムとして、植民地帝国の思想を理解するうえで、これからも長らく吟味されることに違いない。

ただし、こうした緊張感あふれる分析があるゆえに、李光洙を「文明への改宗者」（96頁）として、すなわち彼の思想の営み全般を民族＝近代＝文明への屈服に過ぎない

ものと評価してしまうことについては、やや疑問が残る。ナショナリズムと植民地主義との共謀関係に注目する著者の問題意識には共感するところが多いが、帝国の中心と植民地の間における主体化の意味の差異から来る両者の緊張関係あるいは亀裂の可能性も見逃してはならないのではないか。かつて梶村秀樹氏は李光洙について、『内鮮一体随想録』というパンフレットは、その必死さに圧倒され、日本人として衝撃なしに読み終えることができない歴史的文献である<sup>3)</sup>と評価し、李光洙を簡単には批判できないと述べていた。

## 2. 「植民地／帝国の不均等」と「敵対的な共犯関係」について

第2部では文化・文学の領域における植民地と帝国の中心との連環構造を取り上げている。第3章では古典復興運動としての朝鮮学運動の意味を、第4章では『春香伝』に対する関心に象徴される戦時期における朝鮮文化・文学の位相を、それぞれ分析し、民族文化がいかに帝国文化に利用され、また包摂されていくのかを描き出している。

著者が注目しているのは、“帝国と植民地のナショナリズムが敵対しながらも共存する現実”（1頁）、すなわちナショナリズムと植民地主義との「敵対的な共犯関係」（8頁）である。“抵抗ナショナリズムも、大衆の欲望を刺激・動員・統合しようとする権力意志であるという点で、支配イデオロギーと同様の性格をもつ”（7頁）という説明である。著者はこうした問題意識に立って、“日中戦争期の朝鮮の「古典復興」は、日本主義の文化ナショナリズムや東洋主義の広域的な文化本質主義にたいする批判へとむかわず、その政治的余白に自文化の固有性を描いていた”（133頁）と述べ、いわば文化多元主義とも重なる植民地帝国の文化連環の構造を告発している。

また、第3部の第5章では東亜協同体論について、“帝国日本の中国侵略に便乗する「親日＝協力」の民族主義（親日ナショナリズム）は、「地域的運命共同体」を標榜する「東亜協同体」や「内鮮一体」の同化政策と絡んで、植民地と帝国主義との「敵対的な共犯関係」を結んでいた”（177頁）と説明し、“植民地民族の経済的発展をもくろむ「協力者」の主体性を見つけることが大事なのではない。それよりは、植民地／帝国を貫いていた自己防衛的な「近代化」を反省し、世界の人々が民主的・共生的な関係に開かれるための歴史認識を探っていくべきだろう”（173～174頁）と主張した。

しかし、東亜協同体論の枠組みの中で従属的發展を目指すという朝鮮人の企ては、植民地帝国の秩序に包摂しきれない亀裂の要素を含んでいた。朝鮮の経済的・文化的な独

自性にこだわる転向左派の実践は、屈折した民族統一戦線の側面を持っており、結局、帝国の秩序に受け入れられず封印されてしまったのである。そして朝鮮学運動・朝鮮研究も、単に「政治的余白」を埋めるにとどまらず、世界的な反ファシズム人民戦線・反帝国主義民族統一戦線の動きと連動する、ナショナルな文化および伝統の創造の過程であった。植民地における主体形成の企てがもたらす亀裂の可能性を軽視し、それをすべて近代批判の観点から片付けてしまうと、“李光洙の「文章報国」は、現実化されない「内鮮一体」の虚構性を反証する”（91頁）というせっかくの分析も、「植民地／帝国の不均等な関係」（79頁）、「植民地／帝国の不均質な空間」（237頁）という概念も、すべて意味を持たなくなる。

帝国の中心—植民地の関係こそ近代の本質であるとすれば、反植民地主義なき反近代は空虚になるしかない。そのことは「主体化＝臣民化」の困難／不可能という植民地的条件に対する感受性を要求している。しかし、帝国の中心と植民地との主体化の様式・意味の差異、すなわち植民地帝国からなる近代社会内部の亀裂の側面が正当に考慮されない結果、著者の批判の準拠は、生活者という普遍的な存在へ急激に下降している。

### 3. 「生活者」と「知の不偏不党性」について

第3部の第6章では、戦時期というきわどい状況においてさえ、普遍的価値にこだわることによって、帝国秩序との緊張関係を保ち続けた徐寅植を取り上げている。著者は、民族、近代などのメタ言説に対する批判の準拠を「生欲望」・「生活者」の存在に求めているが、こうした普遍的価値の希求は、終章では韓国や北朝鮮のナショナリズムに対する批判を射程に入れた大胆な問題提起にまでつながっている。

著者は生活者について、“生の場所がいかなる支配の形態によって制限されようとも、より良き生活を念願”し、また“特定の法的・宗教的価値や制度的装置、地理的・文化的境界に先んじて普遍的に存在する”（15頁）と描き出している。すなわち、民族そして近代にも包摂されない普遍者としての生活者の存在を想定しているといえる。そして著者は、こうした生活者を擁護する「民主的・共生的関係」・「知の不偏不党性」（2頁）、「自他の理解関係を公正に直視する自由なる思考の合理的な力」（100頁）を重視し、普遍的原理に徹していた徐寅植の思想を高く評価している。

著者が想定している生活者の概念をより正確に理解するためには、同じく民衆・生活者の概念を駆使して朝鮮近代史を捉えようとしている趙景達氏の研究を参照することが

有用であろう。著者の生活者、趙景達氏の民衆・生活者は、いずれも超歴史的なスタンスを取ることによって、近代批判の可能性を確保しようとするという点では共通している。ただし、著者が“民族精神や民族アイデンティティは自己形成のプロセスではない”という立場をとっているのに対して、趙景達氏は知識人ナショナリズムとは質を異にする自律的で始原的な「民衆ナショナリズム」の存在に注目しており<sup>4)</sup>、民族・民族主義に対する姿勢は大きくすれ違っていることが分かる。これはつまり、民衆をいかに把握するか、すなわち著者のように民衆を、不自然な構成物としての民族に先んじる存在、あるいはそもそも民族とは無縁の存在として想定するのか、それとも趙景達氏のように「民衆ナショナリズム」・「民衆的民族主義」の次元で捉えるのかという差異であろう。

もちろん両者の議論は優劣がつけられる性質のものではない。ただし、著者のいう普遍的で透明な存在としての生活者の場合、戦争や解放のような激動の場では、限りなく受動的な存在として描かれてしまうという点には、何らかの問題性が秘匿されていると思われる。戦時期に関する、“魂の底まで「日本人」になりきろうとした人は、「生欲望」にしたがって食べ物を得るために、忠誠なる死に追い込まれていった”（97頁）という分析や、解放直後に関する、“貧しくて情報に暗い民衆は、「人民主権」をうみだす力をもっていったというよりも、むしろ左右の暴力的対立に動員されるようになったともいえる”（245頁）という分析は、そうした問題点をよく示している。民族という「主体化＝臣民化」を拒否した普遍的存在としての生活者。だが、戦争と解放といった時代の変動に翻弄される無気力な生活者の姿には、「臣民」たることを拒否した結果、いかなる「主体」形成の途までも塞がってしまうという反／近代のアポリアが露骨に現れている。趙景達氏の生活者が「皇民化されていない民衆は、生活至上主義に生きていた」<sup>5)</sup>と描かれており、これがまた始原的民族主義につながることによって、抵抗性を確保していることとはやや違う風景である。そして、無気力に描かれてしまった生活者の姿は、解放後に至っては、ナショナリズムの虜としての南北朝鮮の民衆像へつながるのである。

#### 4. 韓国における民族・民族主義について

解放後における韓国社会のナショナリズムに対する批判は、著者の研究の現在の意味とその射程をよく示している。著者は“親日派だけが「民族の罪人」になるのは、彼らがアメリカ流の自由民主主義のレトリックではなく、天皇制レトリックのナショナリズムに加担して民族利益を図ろうとしたからである”（95頁）と分析し、戦前と戦後との

連続性、すなわちナショナリズムと植民主義の共謀は反復するという基本的な立場を確認している。

しかし、解放以前と以後のナショナリズムおよび植民主義の同一視は、解放という歴史的な転換の意味を軽視した結果である。「自由民主主義」は単なるレトリックではない。たとえば「日帝」下の植民地地主制と「米帝」下の農地改革を比較するなら、その差は明らかである。農地改革はレトリックではない。解放は「解放」である。著者の観点は、あるいは、解放を「解放」として認めない北朝鮮の立場と通じているともいえよう。また、とくに冷戦体制の崩壊後、韓国において民族というコードは悲壮感から解放されて、かなり明朗化（サッカー・ナショナリズムなど）しているのが現実である。1997年の金融危機を契機に民族に対する関心が高揚したが、ここで民族は、経済単位や内需市場（学術や大衆文化の市場を含む）としての側面が強い。著者が批判の対象としている「われら運命共同体」という「原初的合意」（7頁）としての民族主義は、もはや現在の韓国社会では少なくとも主流的言説ではない。すでに／つねに大衆は「生活者」として民族を思考しているのである。

盧武鉉政権はいわゆる「反米自主」のイメージを強く帯びていたが、同時に自ら進んで米韓自由貿易協定を締結し、また世界的次元で行われている米軍再編にも積極的に協力した。韓国社会では依然として南北統一に対する関心が高いが、人々が統一を希望する理由を見てみると、単一民族云々から経済発展の期待へとその内容が変わっていることが確認される。民族も統一も実は近代至上主義や市場万能主義に窒息されているのが、今日の韓国の現実である。

もちろんこうした新自由主義的な再編が民族主義の名の下で進行している側面もある。しかしそれよりはるかに強い勢いで、2006年に韓国で出版され話題になった『解放前後史の再認識1・2』という論文集が象徴するように、民族主義批判が近代至上主義や市場万能主義と同調する傾向を、確認することができる。こうした現実下で、現代韓国社会の思想的課題が、果たして民族主義批判なのかについては懐疑的である。むしろ民族というコードを注意深く観察しつつ、植民地／周辺部として韓国・朝鮮社会が営んできた思想／実践の伝統を再吟味することが、重要ではないかと思う。

## 5. 北朝鮮と「ファシズム的公共性」について

終章では、北朝鮮の現状に対する厳しい批判が行われているが、これは、著者がこ

わるナショナリズム批判の矛先がどこに向けられているかを明確に示しているといえよう。著者の立場は、経済制裁を通して体制崩壊を誘導することを主張する韓国の「ニューライト」の「北韓民主化運動」と軌をひとつにしている。ニューライトは2000年以後に本格的に登場した潮流であり、1980年代に民主化運動を主導していた世代、とくにその中でも北朝鮮の影響を強く受けていた主体思想派からの転向者が主力を成している。

著者は、植民地帝国から北朝鮮へ「ファシズム的公共性」が連続していると把握している。佐藤卓己氏は、ハーバーマスの「市民的公共性」の概念に対して「公共性の非自由主義モデル」としての「ファシスト的公共性」<sup>6)</sup>という概念を提案しているが、朝鮮史の分野でも、並木真人氏によって、「ファシスト的公共性」の概念を援用し、戦時期を「植民地公共性」が完成していく過程として把握する研究が出されている<sup>7)</sup>。植民地帝国の戦時期を「ファシズム的公共性」の概念で把握し、「国民国家の統制・統合の強化と共存可能な社会秩序の模索という二つの動きが拮抗していた」（240頁）と評価する著者の観点は、「ファシスト的公共性」の両義性に注目する佐藤、並木両氏の研究と脈を同じくしているといえる。しかし問題は、こうした戦時期の「ファシズム的公共性」の両義性に対する注目が、なぜか北朝鮮社会に対する分析では見当たらない点にある。

著者は「ファシズム的公共性」の連続性とあわせて、植民地期における転向と現在の韓国における転向（ニューライト）を二重写しにする手法を取っている。しかし、植民地帝国の転向左派が「ファシズム的公共性」への転向であったのに対して、韓国のニューライトは北朝鮮の「ファシズム的公共性」からの転向であるという点に、明らかな差がある。前者が「ファシズム的公共性」に対する内在的批判／理解を志向したのに対して、後者は「ファシズム的公共性」の無視／没理解に基づいているのである。もし北朝鮮を「ファシズム的公共性」の概念で分析しようとするなら、むしろ注目すべき集団は現在も体制維持に腐心しているはずの北朝鮮内部の知識人ではないかと考えられる。

“「先軍政治」の孤立と終焉は間近であろう”（273頁）などの北朝鮮の崩壊に対する著者の予想・期待は、戦間期の社会主義者の資本主義崩壊説さえ連想させる。社会主義の戯画化と人権の蹂躪に点綴した北朝鮮社会を克服するためにも、外挿的非難よりは内在的批判が必要ではないだろうか。著者は植民地期を分析し、“〈親日ナショナリスト〉において、「民族」と「主体」は、そのような物語（「民族解放運動史」）とは遠い植民地の内部に実在したのである”（77～78頁）と述べている。植民地研究で育まれたこうした複眼的視角を、北朝鮮研究にも活かすべきである。



## 結びにかえて — 民族問題の再吟味 —

ジェンダー、社会階層、地域といった多様な主体の錯綜として現れた植民地近代が、ナショナルな主体を無化することなく、むしろそれを浮き彫りにする傾向を示したように、現今のグローバル化した社会でも、一見ネーションの次元を超えているように見えるさまざまな問題が、実はネーションをめぐる葛藤を時にはさらに刺激する形で進行していることを見逃してはならない。民族や国家をめぐる問題群、そしてネーションという回路を通した主体形成の欲望は、決してナショナリズムに回収しきれない。これは、逆に、ナショナリズム批判だけでは大衆の欲望を把握することができないということにもなる。大衆は政治家が口にする安価な民族主義のあやふやさをよく分かっている。しかし、それにもかかわらず、世界秩序の周辺部で生き残るための方法を本能的に体得している彼らは、一方で知識人たちの洗練された民族主義批判も簡単には受け入れない。ネーションの問題性は、ナショナリズムやナショナリズム批判をはるかに超えるところまで根をおろしているのである。

韓国と日本を往来しながら熾烈な時間を送ってきた著者の足跡が率直な文体で込められているあとがきを読むと、なぜ著者がそこまでナショナリズム批判にこだわるのか分かりそうな気がする。帝国の中心と植民地、そして戦前と戦後を射程に入れたナショナリズム批判の真の意味も、あとがきを読んでからはじめて理解することができた。と同時に、単なる研究／分析を超えて、思想／実践へと跳びあがる著者の情熱が確認できたことを、何よりも嬉しく思う。一見過度と見えるナショナリズム批判の荒さ、とくに北朝鮮の現実に対する大胆すぎる言説的介入の危険性を指摘するのは、それほど難しいことではない。しかし、自戒をこめて述べるならば、著者の真の狙いは、学問的慎重さを盾にして現実から目を逸らしてきた知識人の偽善に対する告発にこそあったのである。このことに早く気づいていたならば、著者の思想／実践に対する批判にも少しは慎重になれたであろう。

\* 本稿は2007年8月に東京で開かれた第16回〈帝国と思想〉研究会での報告を整理したものである。

## 注

1) 梶村秀樹「申采浩の朝鮮古代史像」『梶村秀樹著作集 第2巻 朝鮮史の方法』明石

書店, 1993年, 340頁。

- 2) 趙景達「金玉均から申采浩へ——朝鮮における国家主義の形成と転回——」歴史学研究会編『講座世界史7 「近代」を人はどう考えてきたか』東京大学出版会, 1996年, 353頁。
- 3) 梶村秀樹「日本帝国主義の問題」『梶村秀樹著作集 第2巻 朝鮮史の方法』前掲, 313頁。
- 4) 趙景達「日本帝国の膨張と朝鮮知識人——東亜協同体論と内鮮一体論をめぐって——」石田憲編『膨張する帝国 拡散する帝国——第二次大戦に向かう日英とアジア——』東京大学出版会, 2007年, 167頁。
- 5) 趙景達「15年戦争下の朝鮮民衆——植民地近代化論批判試論——」『朝鮮奨学会学術論文集』25, 2005年9月, 20頁。
- 6) 佐藤卓己「ファシストの公共性——公共性の非自由主義モデル——」井上俊ほか編『岩波講座 現代社会学24 民族・国家・エスニシティ』岩波書店, 1996年, 参照。
- 7) 並木真人「『植民地公共性』と朝鮮社会——植民地後半期を中心に——」朴忠錫・渡辺浩編『「文明」「開化」「平和」——日本と韓国——』慶応義塾大学出版会, 2006年, 参照。